

考える前に手を伸ばし、壊れないようにそつとそれを拭っていた。

「仕方ないじゃないですか……つ、許したくないですけど、許さないと僕も失恋しちゃうし、あんなことされても静雄さんのこと嫌いになれないんですから！」

ほとんど自棄状態で嗚咽混じりに帝人が告げる言葉は、静雄にとつてこれ以上ないほどに甘く響いた。それは告白も同然だ。否、告白としか思えない。

「お前が好きだ」

彼の頬から手を離し、代わりに抱きしめる。壊れないように、そつと。

「好きなんだ、竜ヶ峰」

「……知ってます。僕も、です」

悔しそうに、彼が言う。そんな彼は、この上なく可愛かった。心を占めるのは、ひたすらの歓喜と彼への愛おしさだ。ぎゅう、と先ほどより少し力を込めて抱きしめる。文句の言葉はなかった。

「その、次はもつと優しくする」

「そのときは、合意の上でお願いします」

ぼそぼそと小声で告げる言葉は、『次』を肯定するものだった。

「わかった。して良いか？」

「今からですか！」

ぎよつとした様子で帝人が叫ぶように言う。何かまずかったのだろうか、と静雄は首を傾げた。

「あの、今日はもう無理です。その、僕はあまり体力がないんです。今もちよつと、体が辛いくらいで」

辛い、と言われて顔色を変える。受け入れる体をしていない上に、強引に体を繋いだのだから、それは当然なのだろう。

「そういう顔をするのは卑怯ですよ静雄さん……。僕が被害者なのに加害者みたいな気分になるじゃないですか」

そういう顔、とはどういう顔だろう。わからない。わからないが、帝人を見つめると彼は苦笑してぼんぼん、と静雄の背中を軽くたたく。まるであやすように。

「好きです。だから、許します。けど、その、次はまた今度でお願いします」

「今度っていつだ？」

明日か。明後日か。三日後か一週間後か。

いつまで、彼は自分を好きでいてくれるのだろう。ずつと、好きでいてくれるのだろうか。きつと自分はずつといつまでも好きだ。

最初は認識すらしていなかった恋心という感情は、今、どうしようもなく肥大している。そしてこれからも、肥大し続けるのだろうか。それは予測ではなく、——あまりにも確実な、予感だった。

新羅はセルティの虜だと言っていた。ならば自分は帝人の虜だ。この恋に捕らわれた。もう逃げられない。それで良い。それが、良い。

「そ、それはわかんないです、けど」